

P2-262 骨肉腫による骨盤一下肢切除術後 体外受精・単一胚移植にて健児を得た一例成田病院¹, レディースクリニックセントソフィア², 名古屋大³伊藤知華子¹, 辰巳佳史¹, 佐藤真知子¹, 都築知代¹, 上條浩子¹, 山田礼子¹, 大沢政巳¹, 浅井正子², 成田 収¹, 炭竈誠二³, 板倉敦夫³

骨肉腫は骨由来の悪性腫瘍で、思春期に好発し、その発生頻度は10万人あたり0.2-0.3人である。今回我々は骨肉腫治療後、体外受精・単一胚移植にて健児を得た例を経験したので報告する。妻は14才の時、骨肉腫を発症し右骨盤一下肢切除術および化学療法を受け29才で結婚した。夫は結婚時31才で、20才時の交通事故による脊髄損傷でejaculation failureであった。結婚後5年で挙児希望のために当院初診した。十分なカウンセリングののち、夫は他院泌尿器科にて電気刺激による採精を試み、逆行性射精にて尿中精子を得て凍結保存した。妻にはclomiphen-hMG隔日投与による排卵誘発により体外受精を試み、2回目の刺激周期にて2個採卵・顕微授精を行い、双胎を避けるためday3にて単一胚移植を行い、単胎妊娠が成立した。重症妊娠悪阻で妊娠8週から15週まで入院した後、22週から高次医療施設へ転院し経過観察された。32週自宅生活困難のため入院したが、その後の妊娠経過に大きな異常なく、37週6日選択帝王切開にて出生体重2460g アプガースコア8/9の女児を分娩した。骨肉腫は1970年代、手術療法が主体で5年生存率は10-20%と予後不良であったが、近年化学療法の併用により5年生存率は60-70%となっており、骨肉腫既往の挙児希望をもつカップルの増加が予測される。また骨盤一下肢切除術後妊娠は10例以上の報告があるが、体外受精胚移植による妊娠は今回が初めてである。今後は、患者の多様なニーズに応えるために、不妊以外の問題を抱えるカップルでも妊娠・出産・育児が可能になるように、さらにカウンセリングやサポート体制を充実させ、ストレスのない卵巣刺激法や胚移植法を検討する必要があると考えられた。

★P2-263 幼児期のヘルニア手術で鼠径部に嵌頓した子宮を腹腔鏡下手術にて整復し体外受精・胚移植により生児獲得に至った症例名古屋大¹, 成田病院², 可世木病院³安藤寿夫¹, 原田統子¹, 若瀬 明¹, 後藤真紀¹, 下村裕司¹, 柴田大二郎¹, 板倉敦夫¹, 吉川史隆¹, 佐藤真知子², 大沢政巳², 成田 収², 可世木成明³

我々は今回、生殖外科・生殖補助医療の両分野において貴重な、世界初となる症例を経験したので報告する。症例は不妊歴15年の原発性不妊女性で、1歳時に左鼠径ヘルニアの手術歴がある。39歳でA病院初診時、左鼠径部に膨隆した子宮を触知した。29歳の時にB病院で腹腔鏡下手術が試みられたが、子宮が確認できず整復を断念した経緯がある。B病院で開腹手術を勧められたがその後受診しないまま5年以上が経過し、36歳の時、挙児希望でC病院を受診した。C病院では体外受精を予定し採卵は行えたが胚移植は断念することとなり、良好胚2個を含む4個の凍結分割胚が残った。患者はその後受診せず、39歳になり再びC病院を受診した時に、手術目的でA病院に紹介となった。A病院では、卵巣を温存できる保証がないと判断し患者年齢も考慮して、C病院に予備凍結胚確保目的で体外受精を依頼し3個の胚盤胞を凍結、引き続きA病院で産婦人科・外科・小児外科合同により腹腔鏡下手術のみによる整復を行った。子宮や卵管は左円靱帯に牽引され頭側からみて90度以上時計回りに捻転した状態で腹腔外に脱出し、左右付属器の位置関係が逆になっていたことが、周囲組織との強度な癒着を剥離し左下腹壁動静脈や極端に短縮した左円靱帯などを切離することより明らかとなった。癒着剥離後の子宮は漿膜を欠損し月面クレーター様で、癒着防止シートを全面に覆って手術を終了した。40歳となった2か月後にSLIを行い、子宮周囲の軽度の再癒着を完全剥離した後、C病院にて融解胚移植を施行し、初回で妊娠成立に至った。妊娠32週5日、胎児心拍モニタリングでnon-reassuring patternが確認されて緊急帝王切開となり、1666gの男児を分娩した。

P2-264 黒大豆投与による、無排卵周期症の改善について

恵寿総合病院

小濱隆文

【目的】黒大豆を摂取することによる、無排卵周期症の改善効果を観察した。【方法】6ヶ月間以上の無排卵周期を認め、かつ内診、超音波画像、血清学的検査などにより多嚢胞性卵巣症候群やその他上位中枢性の内分泌異常など明らかに医学的に明らかに手術や薬物療法を必要とする者を除外した。36名の患者に嗜好・吸収性を加味し、媒染後超微粉末処理した黒大豆(S)を一日6g、投与趣旨・安全性を説明し同意を得た後、内服させた(S group)。投与後の排卵改善は、基礎体温、超音波による卵胞径、子宮内膜、さらに血清E2測定により評価し、Sを投与しない34名の患者(C group)と比較検討した。【成績】S groupでは、年齢 23.2 ± 4.1 歳、初潮年齢 11.8 ± 1.6 歳、BMI 25.8 ± 3.3 kg/m²、血清E2 41.1 ± 20.3 pg/mL、血清FSH 7.9 ± 2.3 IU/L、血清LH 5.1 ± 0.8 IU/LでC groupでの 23.8 ± 3.7 歳、 12.3 ± 1.8 歳 24.8 ± 2.3 kg/m²、 38.9 ± 18.1 pg/mL、 7.0 ± 1.3 IU/Lおよび 4.6 ± 0.6 IU/Lと比し有意さなかった。S投与期間中、12名が排卵周期を認め、4名妊娠し、また3ヶ月以内に3名が無排卵月経を認めた。排卵日は、投与開始後 66 ± 12 日であり、排卵開始後は高温相7日以上での正常排卵周期の継続が認められた。また、投与6ヶ月後の血清E2 52.3 ± 32.5 pg/mLと有意の上昇が認められた($p < 0.05$)。C groupでは、経過中、排卵出現2名、無排卵月経2名に認められ、6ヶ月後のE2に有意な上昇は認められなかった。【結論】黒大豆は、無排卵月経症の改善効果を示唆された。